

編集後記

編集委員となって約3年が経過し、3回目の編集後記を書くことになった。今回は日本消化器外科学会雑誌に投稿される症例報告の重要性、投稿の際の留意点などを述べさせていただいた。今回は原著論文について思うところを述べさせて頂く。

本学会誌に投稿される原著論文が以前に比べて減少している。いくつかの原因のひとつに原著論文の英文誌への投稿が増加していることが挙げられる。本学会誌の編集委員のひとりとして原著論文の減少は残念であるが、日本の質の高い原著を広く世界に発表して批評を受け、また医療に貢献することを目指すのは当然のことと思われる。実力をもつ野茂、松井選手がメジャーリーグベースボールに挑戦し、日本だけでなく世界に通用する選手であることを証明し、世界の最高峰でプレイしているのと同様である。かといって、医療制度、疾患の頻度、考え方、治療法は国によって異なることもあり、邦文の原著が重要であることはいうまでもない。

原著論文の目的は自らの多数のデータを理論的に構築し、そこから新しい結論を引き出すことである。実際には疾患の背景から研究目的を決定し、証明に必要な研究デザインを構築する。最近の投稿論文の中には、研究目的の結論を導き出すのに最も重要な研究デザインが適切ではないため、述べられた結論の理論的根拠が曖昧な論文がみられる。丈夫な家を建てるにはしっかりした土台、骨組みが必要である。

近年、研究デザインとして prospective randomized study が注目されており、確かに新しい治療法の効果判定などには本法が必要である。しかし、臨床研究では集計する症例数、倫理問題などで本法を用いた研究デザインを組むことが不可能な場合も多くみられることから、retrospective study による研究も重要である。特に若い先生方は初めから prospective randomized study による論文を書くことは困難であり、地道に今までの結果を集積して論文を書く必要があると考える。

本号の原著論文はいずれも力作であり、研究デザインの構築、結果の集積には大変な努力があったと推察する。このような個々の症例を丁寧に分析した原著論文を読ませて頂くのを楽しみにするとともに、先生方同様、自分自身も本当に診療に役立つ論文を書くよう努力しなければいけないと考えている。

(杉田 昭)